

がんプロフェッショナル養成プランが採用され、当部で薬物療法医コースの実習を担当しておりますが、平成 20 年大学院入学の呼吸器内科院生が本年度の日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医試験に合格され、その体験記を記載してくれました。なお外来化学療法部専任医師は 7 名ですが、全員本年度迄に専門医資格を取得いたしましたことも併せてご報告させていただきます。(文責 外来化学療法部 柳原一広)

## 2010 年度がん薬物療法専門医試験体験記

(がんプロフェッショナル養成プラン(がん薬物療法医コース)から)

(文責 呼吸器内科 大学院生 永井 宏樹)

「がんプロフェッショナル養成プラン」(以降、がんプロと略記)は大学教育の活性化を促進し、今後のがん医療を担う医療人の養成推進を図ることを目的として平成 19 年度に文部科学省より新規に設けられたもので、本学は三重大学、滋賀医科大学、大阪医科大学と共同で教育プログラムが組まれています。

私は医師免許取得後から 5 年間の臨床研修を経て、平成 20 年 4 月に京都大学大学院に呼吸器内科院生として入学しました。かねてより「がん薬物療法専門医」になる事を目指していたため、大学院入学時に「がんプロ」に参加し、がん薬物療法医コースを選択致しました。このコースでは大学院在籍の 4~5 年間で学位取得とがん薬物療法専門医取得の両立が求められます。学位論文のための基礎実験とがん薬物療法専門医のための臨床研修のどちらを先にするかは在籍組織の指導医と相談のもと各個人で自由に決められ、私は基礎実験の研究テーマが決まっていなかった事もあり、臨床研修を先に優先する事にしました。

臨床研修は主に外来化学療法部で行われ、週 1~2 回の外来研修、月 1 回の症例検討会、月 1 回の抄読会が中心となります。

### ・ 外来研修

外来研修では指導医のもと様々な悪性腫瘍の化学療法を経験させていただきます。主に受験資格に必要となる造血器領域、呼吸器領域、消化管・肝胆膵領域、乳腺領域の症例の研修が中心になります。私は平成 20 年 4 月~平成 22 年 4 月の 2 年間に渡って臨床研修をさせて頂きました。私の場合は、乳腺腫瘍は 5 ヶ月間(研修期間は乳腺外科カンファレンスに出席)、消化管・肝胆膵腫瘍は 4 ヶ月間に渡って外来主治医とともに外来に入らせて頂きました。また造血器腫瘍、呼吸器腫瘍については期間を決めずに担当症例を中心に外来加療に入らせて頂きました。自分の専門外領域の腫瘍については各種診療ガイドラインやがん情報サイト(PDQ 日本語版)、NCCN ガイドラインなどが参考になりました。後でサマリーを作成する際にも標準治療を含めて知識が必要になりますので、ここでしっかり知識を貯えとサ

マリー作成時に少し楽になると思います。個人的には、私は上記ガイドライン以外にも雑誌を必要なものだけバックナンバーで購入して、参考にしておりました。

・ 症例検討会

月に 1 回、症例検討会が行われます。自分の経験した症例の中からサマリーに適した症例を選び、1 ヶ月で最低でも 2 症例ずつ作成し、症例検討会でプレゼンテーションします。造血器、呼吸器、消化器(肝胆膵、消化管)、乳腺の専門医(がん薬物療法専門医 4 人含む)からアドバイスを頂けます。また、専門領域の垣根を越えた discussion が行われ、口頭試問対策も行われます。和やかな雰囲気で行われ、質問なども快く答えて頂けるため、がんプロ大学院生にとってはとても有意義です。

・ 抄読会

月に 1 回、journal club と呼ばれる抄読会があります。スタッフおよび参加している大学院生が担当するので、実際に自分が担当するのは 3~4 ヶ月に 1 回です。それぞれ担当学術誌が割り当てられ、その中の腫瘍に関する論文を読み、概略を説明します。雑誌は New England Journal of Medicine、Nature、Nature Medicine、Journal of Clinical Oncology、Journal of the American Medical Association、Lancet、Lancet Oncology、Science、Annals of Oncology などがあります。皆で沢山の学術誌をカバーする形式なので、現在の topic などを把握する場としてとても良かったです。

・ 学会出席および発表への支援

がん薬物療法専門医試験の受験資格には日本臨床腫瘍学会主催の教育セミナーへの出席および日本臨床腫瘍学会総会での発表があります。「がんプロ」では教育セミナー(Aセッション、Bセッション)だけでなく Best of ASCO などへの学会参加費や交通費などを援助して頂けます。Best of ASCO はその年の ASCO で扱われた演題の中で重要なものを選択して発表され非常に勉強になりますので、教育セミナーだけでなく Best of ASCO にも積極的に参加した方が良いでしょう。また、日本臨床腫瘍学会総会での発表テーマなども指導医から与えられ、受験資格である総会での発表もクリアできます。

上記以外に、大学からの授業として定期的にコアカリキュラム講義が開催され、本学だけでなく他大学の先生方の講義も受けられます。多領域に渡ってその専門家からの話が聞け、またその領域での topic にも触れられますので、とても勉強になります。これらは e-learning 聴講サービスを利用すればインターネット上で講義を聴けるため、自分の都合のいい時間で自宅・大学内を問わず勉強できるメリットもあります。

ここから先は試験対策について記載します。試験勉強としては「がん診療レジデントマニュアル」(医学書院)がまとまっていて勉強しやすく、この 1 冊を確実に身に付ける事が重要だと思います。これに加えて、教育セミナーのスライドおよびシラバスをチェックすると良いと思います。私の場合はこれらに加えて、各種診療ガイドライン(金原出版)、大学の

コアカリキュラム講義、雑誌(「臨床腫瘍プラクティス」(ヴァンメディカル社)や「腫瘍内科」(科学評論社)など)を参考にして勉強しました。最終的には上記をまとめてマイノートを作成し、試験直前にはこのノートの暗記に専念しました。また、記憶の定着を目的として、MKSAP(Medical Knowledge Self-Assessment Program)の問題を 2 年分解いて知識の整理を行いました(ただし、これらの解答は欧米での医療状況をベースにしており、本邦にそのまま当てはめられません)。

今後、がん薬物療法専門医試験を受験される予定がある先生方のお役に少しでも立ちたく、本稿を書かせて頂きました。現在、外来化学療法部のスタッフにはがん薬物療法専門医が 7 名(2010 年度合格者を含めて)もいらっしゃいます。これらの先生のもとで指導を受けられる本学の「がんプロ」はとても恵まれた環境だと思います。もし、これから「がん薬物療法専門医」を目指されるという方がいらっしゃれば「がんプロ」のがん薬物療法医コースをお勧めします。

#### 「がんプロフェッショナル養成プラン」を経験して

腫瘍を横断的に診る事は、個人の診療や考え方の幅を大きく広げてくれます。これまで専門外だった領域に関する知識が自分の専門領域に活かせる事もあり、とても有意義でした。がん薬物療法専門医試験の合格は腫瘍内科医としての「仮免許」である、との御指摘を指導医から頂きましたが、まさにその通りであると思います。今後も引き続き臨床の中で研鑽を積み、また日々進歩する新たな知見も取り入れていく事で、あるべき腫瘍内科医としての姿に徐々に近付いていけるものと心に刻み、今後も専門領域に捉われる事なく、幅広く腫瘍の診療に携わって行ければと思います。